

葦 第33号 によせて

奈良県立医科大学附属病院

病院長 榊 壽 右

第33号“葦”の巻頭言依頼を受けました。本来、病院長が書くことになっているので、一旦お断りさせていただきましたが、この号は一年遅れになっているので私が書かねばならぬそうです。私の自由気ままに書かせていただいて良いということでしたので引き受けることにしました。従って、学問的でないとかセクハラだとお怒りになるかも知れませんが、それは無理に私に書かせた人の責任とと思ってください。今年になってからですが、看護職に就いているものは女性ばかりとは限らないことから、従来看護婦さんと呼ばれていたものが看護師と呼ばれ、婦長さんが師長さんと呼ばれるようになりました。なんだか軍隊のようだと錯覚してしまいませんか。たしかに看護職に男性もいるのでそうあるべきなのでしょう。しかし病棟で患者さんを相手にするのは、やはり女性でなければだめだと思っています。若い澁刺とした看護婦さんの優しい笑顔には、何物にも増して患者に勇気を与える力があるのではないのでしょうか。ナイチンゲールの母国イギリスをはじめ多くの国々で、看護婦さんと呼ぶときに Sister と呼んで愛情を示していますし、また白衣の天使、白衣の女神と呼ばれてもいます。これらはみんな看護婦さんにのみ与えられた尊称です。男性がどんなに逆立ちしても白衣の天使や女神にはなれないのです。私も、もし手術を受けねばならない患者であったなら、手術は最高の医療をあまり求め過ぎない“心ある男性”に手術をお願いしたいし、看護学をあまり盾にしない“優しい女性”に看護してほしいと思います。このことは時代が変わっても、世の患者が普通に持つ“変わらぬ思い”ではないでしょうか。

戊辰戦争で会津城の落城と共に自害した、会津藩家老西郷頼母の妻、西郷千恵子の辞世の句に“なよたけの風にまかする身ながらもたわまぬ節はありとこそ聞け”というのがあります。私は脳神経外科の医者になって33年、看護職に献身している多くの人達と出会ってきました。こんな人には患者は看させられないと思った事もありますが、この患者を治したのは自分ではなくて“心優しく辛抱強いこの看護婦さんだ”と心から思ったことの方がより多くあります。ヒトを看することは、単なる看護知識の向上だけで到底なしうるものではありません。常日頃からの心の鍛錬もまた必要なことです。

ここで書かせていただいたことは私が日頃個人的に思っている事であって、巻頭言に相応しくないことを十分承知しています。